

時を越えた握手

津田 祐樹



受賞のことは

4年連続で佳作 (GⅢ) をいいただき大変光栄に思います。初応募時は規定枚数を執筆するのが精一杯でしたが、今年は文章を削る作業が大変で、年々書くことが楽しくなってきました。将来は文章で人の心を少しでも動かせるような仕事に就けたらなあと考えております。今後も感謝と挑戦する気持ちを大切に、グラブ (GⅠ) を目指します!!

この度は本当にありがとうございました。

プロフィール

1985年滋賀県生まれの元ホースマン。その後、あん摩マッサージ指圧師、鍼灸師を経て、現在は滋賀県職員。

最近、応援している馬はエフフォーリア。春に阪神競馬場で初対面できて感激!!

傘に当たる雨音がやけに気になる。待ち合わせの約三十分前に到着した。緊張しているから早く到着したのではなく、誰と待ち合わせる際も同じ自身の性格だと言い聞かせた。十五年振りの再会での第一声を考えていると左斜め後ろに気配を感じた。

「お!!」

同時に声が出た。私は、当時から十キログラム以上太った腹を慌てて引っ込めた。

「全然変わらんなあ」

本当に変わっていない彼の姿に、自然と決め兼ねていた第一声が出た。

「お前：ちよつと太ったか!」

覚悟はしていたが今更腹を引っ込めたところで、ここ最近の不摂生はごまかせなかった。

高校時代、既務員を目指し乗馬クラブに通っていた。そこで出会ったのが同い歳の彼だ。

初めて彼の馬術をみた際の驚きは今でも忘れられない。

馬術は主に「常歩(なみあし)」「速歩(はやあし)」「駆歩(かけあし)」に分かれており、その順に速度が上がっていく。初心者はず「速歩」で一つの壁にぶつかることが多い。観光の乗馬体験等でよく行われる「常歩」とは異なり、「速歩」は上下動が著しい。その反動を上手く吸収しないとポンポンと尻が跳ね上がり、馬に負担もかかるし、騎乗者も手綱に頼って掴まるだけで精一杯

の状態になってしまふ。しかし、彼の尻は鞍と接着剤でくっついていてかのように随伴していた。更に「駆歩」に移行すると、背筋はピンと伸びているが肩の力は抜け、踵は適度に下がり、馬の頸は鶴のように美しく、前肢の掻き込みと同時に彼の拳と腰の動きが見事に調和していた。ブルブルと一定のリズムで馬の鼻音とダートを

叩く蹄音だけが響いていた。そして彼は、騎乗中ずっと楽しそうにキラキラ笑っていた。真っ黒に日焼けした顔面から出た白い歯が鏡のように反射しそうだった。

「友達になろうぜ!!」

少年漫画の主人公のように直球で言う彼にびっくりしたが、私達はすぐに仲良くなった。乗馬婦りはとにかく腹が減り、コンビニで買った一番カロリーの高い丸いシユガーパンを二つに分けて合せて食べた。既に競馬をみていた私達は、駅まで自身の乗っている自転車競走馬にみたてて遊んだ。九十六年の阪神大賞典、ナリタブライアンとマヤノトップガンの伝説のマッチレースや九十九年の有馬記念、グラスワンダーとスペシャルウィークの四センチメートル差の名勝負等を二人で再現する。直線右手の森がターフビジョン、左手の田園風景が観戦スタンド、ゴール板はスーパードの赤いポストだ。騎手のムチを打つ動作や追い方も再現し、実況までつけた。一度ふざけ合い過ぎて、互いのハンドルがぶつかり二人共派手に転倒した。幸い擦り傷で済んだが痛かった。しかし、

二人共何がおかしいのか大爆笑した。それ以降、自転車での競馬ごっこは控え当時聴いていたゆずの「夏色」を大声で歌い、ブレーキをいっぱい握りしめてゆっくり帰ることにした。二人で歌いながらどこまでも走れそうな気分だった。

高校三年生、彼と初めて馬術大会で競った。障害競技だ。ルールは決められた経路通りに障害を飛越しタイムを競う。また、障害を落下させるごとにその数に応じて減点される。先に競技を行った彼は次々と障害を飛越していく。飛越の瞬間に彼の視線は次の障害へと向いており、人馬共にためらいがない。タイムは上々だが、惜しくも一つ落下があり減点されていた。次は私の番だ。一つの障害で馬との呼吸が乱れ、右足の鏡(あぶみ)が外れてしまった。外れた鏡がプランプランと馬の腹に当たり、競馬で言うところの引っかかった状態となり暴走気味に走り出した。何とか落馬しないようにバランスを保ち、強引に手綱を引っ張り経路へ誘導し、障害を落下させることなく競技を終えた。暴走されていたのでタイムが早く優勝した。全然嬉しくなかった。教えてくれた先生にも馬に助けられて勝ったけれど、あまり格好良い勝ち方ではないねと言われ、その通りだと肩を落とす。表彰式で三位だった彼は、ヘルメットで乱れた髪を気にしながら笑顔で握手を求めてきた。互いに既作業や騎乗練習により作ったタコがあり、ゴツゴツとした握

手だった。

「勝ちば勝ちや!! 胸を張れ!! おめでとう!!」

猫背で表彰台の一番高い所に立っていた私は、その一言で少し救われた気がした。

高校生活最後の夏、二人で乗馬帰りに、コンビニのレジ横のチキンを頬張り電車を待っていた。夏は自身の汗と馬の汗が混じり合い、なかなか臭い。私は将来、厩務員になりたいと彼に夢を伝えた。

「まだどうするか決めてなかったけど、馬もお前も好きやし俺も厩務員になるわ!!」

「は!? 馬はともかく、俺の事まで好きって言うな!! 気持ち悪い!!」

「イイヤンけ!! 担当馬と一緒にダービーに出そうや!!」

そう言っ肩を組んできた。そんなセリフをサラッと伝える彼の人懐っこさが私には眩しかった。

高校卒業後、互いに別々の育成牧場へ就職し夢に向かって走り出した。メールではやり取りをしていたが、ハードな毎日で会えない日が続いた。そんな中、私は競馬学校の二次試験前に落馬で大怪我を負い、道半ばで夢を諦めることになった。入院中、その噂を聞いた彼からメールが来た。

「大丈夫か? 高校出てから会えてもないしお見舞いに行っても良いか?」

「大丈夫!! また連絡するわ!!」

失意の私は、そのように返信するのが精一杯だった。同時にまだ夢の途中にいる彼に激しく嫉妬した。

それから一年後、退院はしたもののまだリハビリ中の私の右ポケットが震えた。

「あれから怪我の具合はどう? 俺はようやく厩務員試験に合格できた!! やったよ!!」

メールを読み終え、悔しさなにか情けなさなかわかわらず、言葉にならない言葉を発し、以前のように動かな

くなった足を思いっ切りグーで殴った。返信もしない。それでも心のモヤモヤは消えず、右大腿部に鈍い痛みがじんわりと残るだけだった。

十五年程の月日が流れた。何気なく部屋を片付けていると、ゆずのCDが出てきた。今やCD自体も懐かしい。ジャケット裏面に「夏色」とある。久々に曲を聴くと、馬と自転車ばかりに乗っていた青春時代の記憶がよみがえった。夢を叶えた友からの連絡を何年も無視し、自分の殻に閉じこもっていることが急に恥ずかしくなってきた。彼は何も悪くない。あの時、そして今も彼はどんな気持ちでいるのだろうか; 夢を諦めたことと彼を祝福できないことはイコールではない。何を今更と言われることを覚悟でメールを試みた。連絡先も変わっているかもしれない。

「お久しぶり!! 良かったらご飯でもどう?」

謝罪の文面も考えたが、こんな時まで情けない私は一周まわってシンプルな形にしてしまった。すると一分程で返信がきた。恐る恐る人差し指で画面をタップする。「ほんまに久々やなあ!! あの時から無視しやがって(笑) 行こう!! 行こう!!」

(笑)に彼の優しさと器の大きさを感じ、余計に申し訳ない気持ちになった。そしてついに再会の日が訪れた。

待ち合わせ場所で合流した私達は店へ向かった。雨によつて散り出した桜の花びらが、コンクリートにベッタリと貼り付いている。

「体はあれからどうよ?」

「心配かけたなあ; 後遺症はあるけど何とか歩けるようになったよ」

最初は少しぎこちない会話が続きしたが、すぐに当時のように会話が弾んだ。どこかで彼に負けたいと思っていたが、彼との関係は勝ち負けとは別ジャンルにあるのかもしれない。店に到着するまでに楽になりたいと私は口を開いた。

「あの厩務員試験合格したってメール、ずっと無視して申し訳なかった; 正直悔しくて自分に余裕がなかった。本当にゴメン!!」

「俺こそ怪我して馬に乗れなくなった友達に調子乗ったメールやった。ただ、今日はお前の奢りな!!」

彼からの言葉に喉の奥がギュッと締めまり熱いものが込み上げた。

咄嗟に折り畳み傘で横顔を隠し顔と声を作り直す。桜を散らす雨に初めて感謝した。

「だいぶ遅くなったけど合格おめでとう!!」

今出来る精一杯の笑顔で、私から大きく指を開いた右手を差し出した。

「遅いわ!! でも俺もお前がきっかけでこの仕事してるし感謝してるよ!!」

私の手はキレイに戻ってしまったが、彼の手は高校時代の馬術大会時よりエイジングされ、何年も履き込まれたブーツのような感触だった。しっかりとホースマンの手をしている。並大抵でない努力をしてきただろう。正直、怪我から何年経っても競馬界への未練はあるし、彼に対しても悔しい思いはある。しかし、かつてのような不純物のあるドロドロした悔しさではなくなった。その後、店では懐かしい会話に花が咲き、競馬ごっこをして帰ったあの日に戻った気分だった。別れ際、駅のホームで彼が思い出したかのように口を開く。

「今度、俺のキレイな奥さん紹介するわ!!」

「じゃあその時までダイエツトしとくな!!」

ポンと腹を叩くと彼がっこり笑った。そのキラキラした笑顔は、乗馬クラブで初めて出会った頃のままだ。やっぱ彼は最高の友であり最高のライバルだ。次に会うのはここまで時間を要さないだろう。彼が乗る電車が走り出し、まだ少し冷たい春の夜風が私の頬を優しくなでた。